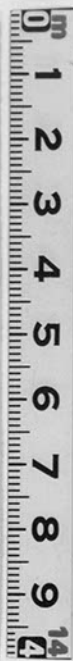


藻思問好

1951



1





又しても新春を迎えることになった。併し月並に唯おめでとうで済まされる程生やさしい新春ではない。それ程吾々の置かれて居る環境は厳しい。世界は正に第三次大戦に向つて一觸即發の危機を胎んで蹙進して居る。而も第二次大戦の後始末がまだはつきりした結論さへ出ぬ現在、所詮は兩立し得ない宿命を擔う世界觀の問題があるにもせよ、それは人類にとつて餘りにも不幸なことゝ云わねばならない。

唯悲しいことに、我が國は現在この問題を自主的に處理する資格は與えられて居ない。けれどもそれだからと云つて吾々がこれに無關心であつてよい筈はなからう。その理由は第一に吾々は好むと好まざるとに拘らず、國際紛争の影響の埒外に立つことが出来ないやうと云う事實、而も早晚何等かの方式によつて講和條約が締結されても、この點に關する限り大差はないであらうと云うことである。第二に吾々が憲法に戦争放棄を大きく理想として掲げた所以は、世界の平和と人類の福祉を希求する悲願に外ならぬのであるから、このことを以て直に自衛權を放棄したものと連断してはならぬ、即ち言い換えれば戦争以外の平和的方式による自衛權の行使は敗戦國と雖も最小限度の固有權の發動として認められることは、一般私法に於て不法行為に對する正當防衛が認められるのと同様だからである。

年頭に當り敢えてこの一文を草する所以は、吾々が環境の特殊性から、動きもすれば視野が狭小となり易く、萬一にも斯様な重要問題を對岸の火災視するならば、又しても嘗ての軍閥のそれの如く少數の赤色獨裁者の好餌となる危険が多分にあることを警告したいからである。(九牛)

一月號目次

表紙	野木健男
☆夢	伊藤文健
☆年頭に當つて	菅野信一
☆年頭に當りて	高萩貞助
やまの誓ひ(二)	車田峯夫
美人禮讃	夢小路眞二
新春頌	渡邊何鳴
春樹幕雲	テネシヤウス
炭屑抄	白木英尾
抑留記(四)	知巨
診療余話	弘中一雄
◎秋季短歌大會記	皆水元
◎句會記	秋岳
◎短歌	白木英尾
◎俳句	渡邊何鳴
編集後記	(秋)

投稿規定

- 一、創作、論說、書評(題其他自由)……………編集部選
 - 一、研究(千字以内)……………同
 - 一、短文(千字以内)……………同
 - 一、詩(題隨意二篇以内)……………同
 - 一、短歌(雜詠五首以内)……………白木英尾選
 - 一、俳句(同五句以内)……………渡邊何鳴選
 - 一、川柳(同)……………編集部選
- 注 意
- ◇用紙は隨意であるが各種別のこと且つ一行の字数は二十字とすること(出來得る限り原稿用紙使用のこと)
 - ◇筆名は自由であるが原稿には必ず本名及び住所職名を明記のこと
 - ◇締切 毎月十日
 - ◇届先 好問思齋編集部又は投稿箱(着到、組合事務所及び鑛業所受付に備付)
 - ◇整理の都合上應募原稿は一切返戻しない
 - ◇掲載分には謝辭を呈する
 - ◇其の他不明の點は編集部に照會のこと
- 以上



夢

所長 伊藤 文 健

夢無い人生は淋しからう。所長は家に歸れば暮はうたず、將棋はさゝず、麻雀は知らず、無趣味で暇さへあれば寝てゐるから夢を尊重するかと笑ふかも知れないが、こゝで云ふ夢は少し意味がちがい、こゝうありたい、こゝうなつて欲しいと念願する氣持を指すのである。私は常に數々の夢を持ちつゞけて居る。これがあまり大きすぎると誇大妄想となり足許がふらつく實現出來さうな夢を連續して持ち度い。

坑内労働は重労働である。その内でも採炭の仕事は重い。その採炭の仕事で體力を消耗する大部分は炭をスコップで炭車にはね込む作業である。此労働を軽くする夢を持つて居た。機械力で代へるべきがと誰でも感づくが、さて信頼出來し、かも好間の坑内に適充する機械が仲々見つからなかつた。

八月には出炭不振をきはめ月産やつと一七、五〇〇屯、實に慘憺たるもので、これではとても山の經營は成立たない。月産三万屯規模と自他共に許して居るこの好間でこの有様ではてんで問題にならない。この少し前三池製作所は十四型ローダーを完成し、三池技術陣の頭腦をもつてしては以上のものは考えられぬと自信満々のものが登場した。

然し同工場で製作工程に乗つて十二臺はすでに賣約済で直ぐ欲しくても手に入らぬと云ふ。好間の重大危機を感じた鑛務課長は三池に急行した。三井社内では使ふ豫定の三臺を無理やりに割愛して貰つた。九月十四日赤い體のローダーがはじめて山についた。技術幹部は採炭夫になつた氣持でローダーと取組んだ。ローダーは兩腕を無氣味に交互に動かしなが

ら炭を抱え込んで行く。機械は物言はぬが仕事はまだ足らぬ精一杯働かして貰えぬかと不満氣にさへ見える。此機械をふやしてさへ行けば積込み勞力を軽減し得る見込がついた。従つて私の夢は實を結んだ。九月二三、〇〇〇屯。十月二七、五〇〇屯。十一月は三〇、〇〇〇屯を突破しさうである。

出炭は好調、需要は旺盛、この絶好のチャンスに到る大きな障害があらはれた。それは朝鮮動亂による貨車不足である。石炭はどんどん出るが送り出せない。貯炭は毎日ふえて行く。

ポケットには入り切れず土場貯炭をやり、これもやがて一杯になれば出炭制限を考えねばならぬ。私は同業の各責任者と共に屢々司令部、運輸省に陳情して歩いた。然し思ふ程の貨車はまはつて來ない。貯炭は益々ふえて行く。其時炭勞は立ちあがつた。

各勞組代表が上京して強烈な運動を展開した。各方面共常磐地方の實情を認識したやうで貨車はまはりよくなつた。勞働組合と云ふものは會社と喧嘩するものと世の中で考へて居る。喧嘩のはげしい者程有力な幹部と思はれ勝である。然し斗争が過ぎて山を潰した所もある。

私は常に會社も組合も職場を守る爲に協調すべきものであると云ふ夢を持ちつゞけて居た。職場が潰れてはお互不幸になる。お互の幸福を得る爲には皆が骨を折るべきである。

此貨車不足に立ち上つた炭勞の姿は誠に立派である。この儘貨車不足がつゞけば臨時公休、賃金遅拂、更に賃金引下げまで行かぬものと誰が保證が出來やう。

私の夢はいゝ實を結んだ。

年改つても依然として私は數々の夢を見つゞけるであらう。(終)

年頭に當つて

組合長 菅野 信一

古河好間炭礦労働組合が結成されて以來六年になる、終戦の鐘と同時に民主日本の建設のため労働者に課せられた使命は先づ日本經濟の再建であり産業の復興であつた。當然當古河労働組に於ても基幹産業として混亂の中から立ち上り戦争當時の亂掘から極度に荒廢した惡條件とたゞかひ今日まで生産の増強に全精力を傾注してきた。そしてその成果に遂次効を奏し月産量に於ても個人能率に於ても目ざましい躍進ぶりを示すに至つたことは喜ばしい限りである。

このように優秀な成果を収め得た際には勿論經營者就中技術者の計畫にもよるが、我々労働者の生活を犠牲にした理解と協力があつてはじめてなしたことで、自負して止まないものである。古河労働組合は過去六年にわたり斗争をつゞけてきたが何如なる斗争の場合に於ても生産の増強のた

めの斗ひであり生産増強のための要求であつたことは自他共に認められるところであらう。たまたま労働組合は要求團體であるかの如き比喩をする者もあるが我々はあくまで労働運動と生産とは表裏一體のものであり、あくまで生産への準備いわけゆる働力の再生産のために正しい賃金、人らしい生活を營むに足る賃金給與を要求し不當な階級搾取に對して斗争する團體である、従つて斗争中に於て何如なる可烈な斗争をつゞけても協定調印がなされたならば本然の態に立返つて生産に協力すべきであることは言ふまでもないし當然行つて來た事實である。昨年八月賃金協定の際、生産低下は遺憾であつたがこれとて經營者が組合に申入れたような労働者の責任ではなく制度の變更から一時的にもたらした混亂のための現象に過ぎないことである。昨年は年頭より波らんをきはめた年であつた。特にレッドパージ問題については組合側の立おくれもあつたが内外狀勢は労働組合にとつて有利ではなく敗北の結果に終つたことは全く痛恨事であつたが組合員諸氏は萎縮することなく正常なる組合運動に精進されたいことを希むものであります。

一九五一年の新春を迎へて古河好間炭礦も生産計畫も確立し企業計畫も第三堅坑の完成も近く前進は明るい。労働組合はあくまでやまを守り不當搾取を斷呼排除して生活權確保のため諸君と共に邁進することを新たに決意するものである。

年頭に當りて

社員組合長 高萩 貞助

一休和尚の言葉を借りれば芽出度もある年頭が訪れ、年が改まり芽出度船出をするのである。何れの意味にしても祝福されるものと考られて來た慣習から見ても祝福されるものである様に過去を振り返つて依り良い出發となる様にすることが大切である。

であるとすれば二十六年を依り良い年として迎える爲には如何にすれば祝福される事になるでせう。第二次世界大戦の余燼も未だ消やらぬ敗戦日本の姿なのに朝鮮動亂の勃發となり新聞の傳る處では第三次世界大戦の危險は増大しつゝある様に思はれ刻々として恐怖を感じられ平和の念願は日と共に戦争を放棄した日本の姿の薄れて行く様な頼りなさを身近に覺える。國際連合が平和の努力も何か私達には地に足の着かない様な不安なものを投げかけて居る様にも取れる。

こんな事を思ふとき果して良き年となることが出来るだろうか。

石炭産業の興隆を念願し明日の希望にひたむきな精進を續け日本の繁榮を思い文化生活の向上を求めて努力を傾けた石炭産業人の過去は戦争と言ふ現實の姿とは云い餘りにも悲惨なものであつた事を考るとき、大きく寫し出された世界第三次大戦の恐怖の前に何を考いさせられる事であらう。思を新たにして祝福される日本となり繁榮する石炭産業となる幸運を求めて希望の失はれぬ精進をする事に依つて打開される道はある様に思はれる。

國際情勢を他所にして日本だけの繁榮はあり得ぬ事と思はねばならないとすれば、占領下の日本の姿は實際問題として世界から招かれる客となる事が何よりの手段となるのであらう。随つて經濟に文化に技術にあらゆる面での育成と興隆が必要であり、秩序ある努力が要望されるものと思ふ。石炭産業人の使命も國際情勢の中に任じて促進されねばならない。世界的軍擴時代と言はれ間接的にも特需の増大を豫想されるとき安定水準の發展を希望することが出来ると思ふ。

第三次世界大戦の恐怖の中に日本のある可き複雑な姿は時代想と共に進展し、常に流轉の明暗を映して社會の歴史を作るとすれば明日の希望に今日の努力を惜しむことはやまぬであらうし奇蹟による幸運は考めであらう。

石炭産業の發展性の希望は社會の實態によつて明かにされる安定性の高められる事を待望する。



◆ 炭 礦 の 話 題 ◆

— や ま の 誓 ひ —

(二)

車 田 峯 夫

ホ タ ル

悉し暑い晩である、星は降るように美しくきらみいているが月はまだ昇らない、炭礦の煙りが反映して村はほのかに明るかつた。
友人野本の家を出た周二は石炭を運ぶ炭礦の鐵道専用線を縣道との間にある幅二米程の川添ひの村道をゆつくりした足取で歩いていた。
この附近も先日嵐に荒されたと見えて石ころがところ／＼に突出ていて歩きにくい。農家の多いこのあたりは寢靜つたと見えて、聞えるのは炭礦から流れてくる機械の音ばかりである。

ホタルが一匹、傍の草むらから周二の横顔をかすめて遠く飛び去つた。その行方をちつと見つけていた周二の耳は、バク／＼と小さな足音が急ぎ足に近づいて來た。何気なく振り返つた周二はハットした、美しい野本の妹美佐子が真剣な顔色でデツと周二を見つけているのである。

實は歸りにはかならずお送りするから、知らせてくれと美佐子に云はれていたのであるが、年若い女と歩くのにはあまりにも時間が遅い、そう思つて周二は美佐子にはことほりなしに歸途に着いたのである。その美佐子が余程急いで來たとみえてはく息が苦しそふだ。

周二は何か一言云はなければ美佐子に悪いとは思ふが言葉が口をついて出ない。

ホタルが一匹草むらから飛び立つた。

「周二さん」

美佐子はいら／＼した氣持で周二に話しかけた。

「済みません」

周二は悪いと思つていた故か、自然に言葉が穏やかに口をついて出た。

「約束したのにひどいわ」

「あまり遅くなつたものだから」

「私、いまか／＼と待つて居たのよ」

「それで兄さんは」

「兄さんは勉強らしいわ。私兄さんに言はれて貴方がお歸りになつたことを知つたのよ」

何時か美佐子の言葉もやさしく變つていた。

「お父さんやお母さんは」

「お客様まだ歸らないのよ」

「それちや美佐子さんと歸らなくちや悪いでせう」

「……」

「僕お送りしませう」

周二は美佐子からいろ／＼野本の最近の様子を聞きたかつたが、後日伺うことにして美佐子を家迄送つて行くことにした。

二人は肩を並べていま來たばかりの道を引返した。

「悪いわ」

「いゝんです、約束して置きながらだまつて歸つて來たのですから」

「兄さんとおんなお話しをなさつたの」

「兄さんは坑内に入ると云うのです」

「兄さんが坑内へ……」

周二は坑内さきいて美佐子が驚くかと思つたが美佐子はさして驚かなかつた。

「美佐子さんは兄さんから何か聞えているのですか」

「何も聞えて居ないわ、どうして」

「兄さん最近何も變つたことない？」

「別に……」

二人はいつしか美佐子の家の前に來ていた。

「美佐子さん、近いうち僕がお邪魔に伺ひますとお父さんにおつしやつて下さい」

野本は親父は僕が話をするから母親の方を納得させてくれと云つていたが、母親より父の方が話がわかる、そう思つたので周二は、美佐子に頼んだのである。

「いつ來ます」

「四五日のうちに伺ひます、では……」

「済みませんでした、わさ／＼送つて戴いて」

周二は美佐子の暖い目差を脊中に感じながら再び我家への歸途についた。

乙女の感傷

八月の曆も残り少なくなつた。よく晴れた或る日、同僚達が〇〇課の東脇の芝生に寝ころんでいる晝休みのひととき
〇〇課に事務員として働いている山本敏子は同じ課の野本

と、少し離れた見渡しのよい芝生に腰を下して語り合つていた。

「秋雄さんはどうしても坑内に入るつもりなの」

「さうです」

「で両親が許して下さい」

「實はそれで困つて居るのですが……まあなんとかうまく説き伏せるつもりです」

「それで何時頃坑内に入るの」

「九月からだと思うんです」

組合と會社との話し合ひでは九月一日から實施したい意向であり、組合生産部に於ては既にその準備も完了した様子だつた。

「それちや秋雄さんと一緒にお仕事出来るのも僅かですのね」

敏子はそう云うと美しい眉に寂しそうなかけを見せた。

二十歳になる山本敏子が野本秋雄と知りあつたのは今年の四月だつた。敏子の家庭は親の代からこの炭礦に住み、現在兄も坑内夫として働いていた、又弟や妹もあつて敏子が嫁に出ることによつて家が困ると云う心配もなかつた。敏子が事務員として〇〇課で働くようになってから二年になる。野本よりは一年程古い、敏子としては將來性のある野本を坑内に職變させることにはどうしても賛成出来なかつた。出来ることならこのまゝ一緒に働いて貰ひたい。

い。自分の愛する人が傍に居ると云うことは、戀を知つた乙女には嬉しいことであり、心強く感じさせる。然し男が一度決心した以上そうやす／＼と意をひるがへさないであらうし、ましてや親の反對を押し切つて迄、自分と一緒にならうとする男の前には、嬉しいと思ひこそすれ反對する理由は何一つなかつた。たゞあるものは危険な坑内作業に地位も財産も捨て、自らの愛情のために飛び込んで行く強い男に對する思慕の念と、なれない坑内でうまく働いて行けるかどうかという不安だつた。

然し何もかも打ち明けて話し合つて居るうちにいつか敏子の心はそうした不安から遠のいて、愛し合う男と女の感情が温く解つて行くのだつた。

そうした時急にさわめいた聲が程近いズリ捲線から起つた。

何事であらうと視線を移した二人に映じたのは事故のある時、それも重傷のため歩くことの出来ない負傷者を乗せて運搬する、タンカを手にした數名の勞務係の人々だつた。

坑内に事故があつて重傷者を運んでくるのに違ひない。坑外よりどうしても危険の多い坑内、今迄晴々としていた敏子の顔は急に曇つて來た、それを男に知られまいとして目前に高く聳いる堅坑のやぐらにデット目を注いだ。

野本もタンカを見たトタン、いゝ氣持はしなかつた。坑

内に職變しようと決意して話し合つて居る時にこの事故である。

なんとなく前途に不安を感じて野本の顔も青白かつた。二人の語りは妙にしらけてしまつた。それを助けるかの如く〇時半のサイレンがすぐ傍の着到前で鳴りわたつた。思ひ出したように二人は立ち上つて〇〇課に入つていつた……

それから間もなく、先程のタンカが、痛々しい重傷者を乗せて〇〇課の前を通り病院に運ばれていつた。

父と子

「兄さん、お父さんが用事があるさうよ」

遅い夕飯を終つて、自分の部屋で日誌をつけていた秋雄は妹の美佐子に呼ばれると、妹には無言のまま部屋を出て父の部屋に入つた。六十の坂を越した父は、兄の春雄夫婦としきりと何か話し合つていた。

「お父さん、用事つてなんですか」

秋雄はさう云ひながら兄夫婦の傍に腰を下した。

「お前の友達に齋藤と云う男がおるだらう」

「おります、お父さんもよく知つて居る筈ですが」

「あゝ、時々家に見えるあの齋藤君が」

さう云う父の顔をしげ／＼とみていた秋雄は、周二が父に自分が頼んだことを話したのではなからうか……フ

トそんな事が浮かんた。

「その齋藤がどうかしたのですか」

「實はなあ秋雄」

そいつて父の語り出した所によると、今日開かれた村會の席上、炭礦から選出されて居る議員團のなかゝら、今回の水害によつて流出した橋や、破かいした箇所を早急に修理する案が提出され、村の議員團との間に面白からぬ空氣が漂ひ、村會は今迄かつてなかつた困亂に落ちいつたのであるが、議長である秋雄の父の發言によつてどうにか無事に散會したのであるが、今日の空氣から察するに、次回の村會にも一波瀾はまぬかれない、と父は語つてきかせた。

ちつと聞いていた秋雄は今日の村會と周二がどのような關係があるのか、判斷がつかなかつた。兄夫婦も不思議そうに父の話を聞いていた、又母と美佐子も少し離れた所から裁縫道具をひろげ、ちつと父と子の話に耳を傾けていた。

「それで齋藤とどんな關係があるのです」

「實はその原因があの齋藤君にあるらしいのだ」

「だつて齋藤は村會議員でもないのにおかしいでせう」

「村會議員でなくとも組合があるだらう、組合で發言をし決定したものを炭礦から出て居る村會議員に提案し發言すれば、齋藤君が發言したと同様だらう」

「然しそれにしても、流出した橋や破かいされた箇所を早急に修理させる發言を、何故そのように村の議員團が反對するのです」

「だから素人は困ると云うのだ、かんたんに右から左に村の財政が自由に出来るか、大體齋藤君の云うことが無茶なのだ」

「然し村の事を村會で決めないで誰が決めるのです。ましてあの嵐からすでに一ヶ月以上も経過して居るのに何一つやつていないぢやありませんか、齋藤の云うのは無理ぢやありませんよ」

いつか秋雄の聲は荒々しくなつていた、それは、あなたが齋藤の事からばかりではなく、我が家の古い封建性に對する新しい時代の反撥でもあつた。

「秋雄、お父さんは村會議員の一人として、又議長として橋の修理や荒された個所の修繕ぐらゐはわかつてゐる、然し現在の村の財政を考へる時、お前や齋藤君のいうようにかんたんに賛成も出来ないし、提案も出来ないのだ」

「出来ないからといつて、あのまゝにして置いて、又大雨が降つたならどうする氣なのです。それでもお父さんは齋藤の云う事が悪いと云うのですか、そのくらしいの提案でもつて炭礦の議員と村の議員が面白くない感情になるのですか」

烈しい我が子の言葉に父親は驚きの目をみはつた、おと

なしい我が子にこのような氣魄があらうとは思つていなかったのである。

母も美佐子もハラ／＼して裁縫なぞ手につかなかつた。兄夫婦はいつか座を去つていた、丁度その時、玄關にしきりと室内を乞う男の聲がした、母の顔をみやつた美佐子は無言のまゝ立ち上つて玄關に出た。

「あつ周二さん」

驚きの聲をあげた美佐子の前に父と子の儉惡な話題の中心になつてゐる齋藤周二がにこ／＼しながら立つていた。長い夏の陽も西に没し、やうやく暮色があたりになぎり、虫の聲が寂しく美佐子の胸を打つ……………。

以下次號

元日や島をたよりの港口	月舟
今年はや二日となりて翕然なり	虚子
平生の朝寝となりし三日かな	露月
新聞の淋しくなりし四日かな	夢の華
松既に五日の門に乞食來て	豐陽
松の六日嫁入する家のあり	〃
厨覗く睦月七日の雀かな	〃



美人禮讃

夢小路 眞

私は美人が好きだ。街を歩いてゐても、自動車に乗つても、美人らしいものにぶつかると安心に近いものを感じる。かつて私の同僚に面白い人間があつた。

「美人なんて詰らぬものだ、年を取ればしなびるし一時的なものではないか」

と言ふのだ、いかにも悟つたような言葉だが、私達は一生幸福で暮せると言ふことは、先づもつてあり得ないことであるし、私達は今日の生活に於て瞬間的な快樂や幸福だけであつて、まして今の時世には永續的な快樂や、美や、幸福を保つことばなか／＼むづかしいことである。この心理があれば美人禮讃もうなづけると思ふ。

ある外國雜誌に、

「女に必要なものは、生まれてから十八歳まで——良い両親、十八歳から三十五歳まで——美貌、三十五から五十五まで——個性、五十五から先きのお婆さんには現金」とある。

これは外國のことであるが、日本においても美貌が如何に大切なものであるかはいうまでもない。

「鬼も十八番茶も出ばな」というのは女性の若さと美しさを表わしたものに外ならない。人間は生れながらにして美を求める觀念が強い。これは恰も生れながらにして美への向上心があるのと同じである、生れながらにして醜を好む者は先づあるまい、あつたとしたら變態であり動物にも劣る。或る人に聞くとサカリのついた山鳥やキジの容姿たるや實に美觀を呈し、トサカの眞紅な色は惚々れするということだ。

美人に關する書物も科學的なもの、肉體的なもの、心理學的なもの、種々あるが、私の讀んだうちで肩の凝るようなこともなく見られたのは、最近古本屋で求めた「近世美人傳」又五年前求めた、「女體の數字」と言ふ本であつた。

さて美人と言へば。自分の好みに應じて語る場合が多い、勿論美人といつても多種多様である。近世の美人では先づマダム貞奴、樋口一葉、松井須磨子、九條武子、であるといはれてゐる。又昔から日本の三大美人と云はれてゐるのは、光明皇后、この方は佛心も世にすぐれ、慈悲も深く、今日の慈恵病院のような所でライ病のカタを流してやつたと傳えられてゐる。次に衣通姫、これは允恭天皇の妃で皇后の妹、第三に右大將道綱の母で東三條入道兼家の室である。その他學べて來れば数え切れない、西洋にも宿命の妖性クレオパトラがいる、この美人に迷つてローマの英雄が國を危くしたといふ、歴史家の説では若しもクレオパトラの鼻が、もう少し低くかつたら世界の歴史が全く變つて了つたであるといふことである。絶世の美人として歴史に名高い。それから我國に「謎の美女」と言はれる小野小町がいる、史家の中にもその正體について今にいたるまで定説はないが實在してゐた女性であることは確かなのだ。參議小野篁の子で出羽の國より采女として召出され、宮中に仕へ、四十歳位迄、歌と美貌で世の男達を懾服したこと、幾多の古典に於て一致してゐるが、なぜ「謎の美女」と云れたかは皆さんのなかにも、うなづける方があると思ふのでここでは述べない。本當に美人という以上心も身も申分なく美しく完全でなければならぬ。

いろ／＼と述べたが、結局どんな人間でも美人と號稱を

ならべておいて何れを要るかといつたら、よほど心が悪くない限り美人を選ぶに違ひない。これでこそ人間である。幸福を望むことは人間本來の欲望であつて、向上への欲求でもある。藝術とは美の世界への欲求であつて、人生にくてはならぬ要素である。

空の麗はしき、地の美しき、萬象の妙なる中に、人間美は永遠の誓へは出來ぬものなれば、私は刹那の美を感じさせられる。

新春頌詠

渡邊 何 鳴

瓶梅のつぼみこごしく 去年今年
初日影書架のレクラム文庫え
若水の桶二釣瓶にて満てり
元朝のながるるいのちみつめいる
巖頭の松斜めなり初日の出



春 樹 暮 雲

テ ネ シ ヤ ウ ス

張籍といふ唐の詩人は性狷直と云はれる位で、減多なことでは人に頭を下けたりする男でなかつたと思ふのだが、杜甫の詩集を焚いて灰をつくり、これに蜜をまぜて、頻りに服用しては身神の大改造を企てたといふ。

この位の信心話なら別に珍らしいこともあるまいが、とに角杜甫はシナ全史を通じて最も崇敬される一人であつて、古詩以來「詩聖」を以て稱される唯一の存在である。――と、先づ受け賣りさして貰つて置こう。

杜甫、字は子美、唐の大極元年（西紀七一二）年、都長安の近郊に生れた。わが國では丁度二年前に京を平安に遷したところであつたが、平安京が長安を模したものであることは此所にこゝとある迄もあるまい。遣唐使や留學生が踵を接して出かけて行つた有り様が目に浮ぶやうで、まことに懐かしい次第だ。

少時より利發であつたらしく、七歳能く詩を作り、十五歳にして文士と應

酬したと云ふ。但し、後年自ら

讀書、萬巻を破り、
下筆、神有るが如し。

などと大言するあたり、些かは自惚れて居たかも知れない。

一體その上、魯の理想家孔丘が諸國を説いて歩いた春秋の頃にはシナの國は未だ族長社會の域を出てゐなかつたのだが、秦より漢にかけて次第に統一國家の組織を経験するにつれて、官吏の社會的勢力は強大となり、同時に官僚統治の理論としての儒教が大成されて行つたのであつて、恰かも國威四海に輝く盛唐の代とあれば、晋の征南將軍杜預の血を曳き、又初唐の熱血詩人杜審言の孫に當る、才氣煥發の少年子美が思ひを治國、平天下の道に至したこともまた異とするに足るまい。

大いに勉學して玄宗皇帝開元二年二十四歳の年に進士の科を受けた。これは地方から推薦される英材の中から中央官吏を徵用する登龍門であつたのだが、試験科目は詩賦を主としたから彼

としては自信満々といふところであつたろうに、意外にも登第しなかつた。才をたのんで輕卒なる辭句を犯したのもであらうか。尤も、此の試験ではともすれば詩そのものの巧緻よりも、作詩に於いて試験官の意を迎へることの方が合格の條件とされ勝ちであつたことは夙と指摘されるところである。兎角試験は水ものだ。

天寶六年三十六歳、玄宗が天下に詔して一藝有る者を求めたのに應じたが又もや用ゐられなかつた。此の時は、李林甫といふ宰相が野に遺賢あらしめたあつては自分の落ち度になると考へて、主務官廳の尙書省に命じて一人も採らなかつたのだそだ。

再度の落第ではすつかりくさつたらしく、それ迄は、君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしめん。

(奉贈韋左丞丈二十二韻)

と、大いに意氣込んで居たのに、今は只だ空しく朽ち果てるのみの身となつ

てしまつた、などと愚痴つて居る。併しすぐ續けて、

白鷗、浩蕩に没せば
萬里、誰か能く馴らさむ。

(わだつみの海の果てには人も來ず遊ぶかもめは樂しかるらむ)

(同前詩)

などと負け惜しみを言つても見た。

天寶十年齡四十、玄宗が老子廟、宗廟及び天帝の大祭を執行したとき、三大禮賦を奉つたのが認められて、始めて集賢院詩制を命ぜられ、次いで京兆府兵曹參軍といふのになつた。

然るに、當時唐の文化は既に爛熟を超えて頽廢に進み、玄宗は楊貴妃を溺愛して國政を顧みず、ために綱紀はみだれ、貴人富者の臺所には肉が腐つてゐるのに、道路に凍死の骨が腐つてゐるという状態で、世情漸く不穩を兆してゐた。果せるかな、天寶十四載、例の胡人にして帝の寵遇を蒙り、節度使に拔進せられて居た安祿山や史思明がそむき、玄宗は長安を棄て、成都に

亡命し、楊貴妃亦自害するといふ一大事態を生じた。

杜甫は三川で賊の手中に陥つて、幽囚十ヶ月に及び、辛うじて脱出した後も東西に流離せねばならぬ爲禍となつた。

國破れて山河あり、
城春にして草木深し。

時に感じては花も涙をそそぎ、
別れを恨んで鳥も心を驚かす。

(春望)

は此の頃の句である。

安史の亂が平安されてから、新帝肅宗に謁して左拾遺の官を拜した。微祿ながら供奉諷諫に當り、任は重かつたので大いに緊張精勵したが、氣合が入りすぎて、一將軍の人事問題で時に痛言を呈したのが禍して官を捨ててに至つた。其の後の生活は一入け窮迫し、特に、乾元二年の飢饉には、林間に木の實を拾つてわづかに露命をつないだ。乾元中同谷縣に寓居して、と題する七篇の詩に具さに詠するところであ

る。

一

客有り、客有り、字は子美、
白顔の亂髮、垂れて耳を過ぐ。

歳々、櫟や栗を拾うて狙公に隨ふ、
天高く、日は暮る山谷の裏。

中原、たより無く歸らむとして得ず、
手脚は凍え、あかきれて皮肉死す。

嗚呼、一と度び歌ひて歌すでにかなし、

悲風我が爲めに天より來る。

四

妹あり、妹あり、鐘離に在り、

良人は早く歿して諸孤はおろかな

り。

嗚呼四度び歌ひて四度び奏す、

林猿我が爲に清晝に啼く。

七

男子生れて名を成さず、身すでに老

ゆ、

三年、饑ゑて走る荒山の道。
長安の卿相少年多し。

富貴まさに須らく身を致す早かるべ

し。

山中の儒生、もと相識る、

たゞ、宿昔を話し、懷抱をいたむ。

嗚呼、七度び歌ひて悄として曲を終

る。

皇天を仰ぎ見れば白日速やかなり。

零丁、衣食に事を缺く杜甫の一家。

數兒を残して夫に先立たれた彼の妹、

村々の壯者は兵に徴られて、婦女や老

人、子供らが飢えて居る。人心は荒廢

し、道德は地に墮ちた。おもへば、彼

自身の志を天下に述べる日もいつのこ

とか。

此の時、彼の子女數人が餓死したと

傳へられる。

二十世紀初頭に清朝を倒して近代的西歐民主主義政治の洗禮を受けたシナ國民は、二十年にわたる外戦内亂の後、に今や又、全く新奇なるイデオロギーの支配を受けつゝあるかに見える。そこには生れ出づるものは何であらうか。彼等は今何を思ひ、何を詠つて居ることであらうか。後、蜀の鎮將たり

し好友嚴武に頼つてその厚遇を受けた

が、嚴武の卒するに及ではいよ／＼落

魄するばかりで、軍閥の内亂繼起し、

外蕃またしきりに國邊を侵す中を各地

に飄零するうち、持病の肺病と糖尿

が募り、ついに大歷五年冬、岳陽と長

沙の間邊りでさびしく死んだのであ

る。一説に嶽祠に舟游するとき大醉し

て水に没したとも云ふ、享年五十九で

あつた。

○ ○ ○

杜甫は儒教的な道義政治を想うて官

途を志した。

艱辛に遭ひて節を屈せず、ひたすら

に君國を憂へ、民衆を憐むその至情は

張籍らをして深く傾倒して措かしめな

い處ではあるけれども、而も彼は國事

に於て業績を顯はすに至らなかつた。

又、もと／＼は蔑視して居た世俗の地

位や財帛にも、時として心をひかれた

ことは詩中に散見するのだが、上司に

取り入つて榮進したり、收賄、横領な

どの役得によつて産を築いたりする腕

前を彼は持たなかつたらう。

一介の官吏として、彼は世事に疎く實務に暗い、そのくせいやに理窟つばくて強情なところのある——といふやうな、他人には仕末の悪い下級事務官にすぎなかつたのであるまいか。

彼れ此れ思ひ廻らせば安徐たらざるものがあつたらしいが、さりとて他の多くのシナ詩人に見る如くに山水に逃避して孤高を誇るの途をも選ばなかつた。

冷酷なる現實の中に理想と生活とを押し進めるべく、あくまで努力することとに彼の本領があつた。それが彼の詩魂をます／＼高揚せしめ、杜詩の雄勁熾烈なる具象性を成するものなのであると云はれてゐる。

さて、彼の詩に就いても常に思ひ合はすべきものは酒であらう。

彼の酒を嗜むこと、甚だ熱烈で深刻なるものがあつた。

酔うて沙場に伏す君笑ふ勿れ、

古來征戰幾人かかへる。

(涼州詞)

飲んで、飲んで、飲み潰れされば止まぬ人の切迫したかなしみがこゝにある。

昔、學生が好んで高吟した

——貧交行——

手を翻せば雲となり、手を覆せば雨紛々たる輕薄、なんぞ數ふるをもちひん。

君見ずや、管飽貧時の交り、

此の道、今人棄てゝ土の如し。

又、古今岳陽を吟う者數多き中に、衆目の等しく認むる第一品。

——登岳陽樓——

昔聞く、洞庭の水、今上る、岳陽樓。

吳楚、東南にひらけ、乾坤、日夜浮ぶ。

の壯大より、これを承けては

親朋、一字無く、

老病、孤舟に在り。

戎馬、關山の北、

軒によつて涕泗流る。

の悲哀に至る、いづれもその時代的背景と、彼の置かれた境遇と、そして今一つ、一瓢の酒とを念頭においてこそ解し得るものといふべきであらう。

杖に倚つて孤石を看、

壺を傾けて淺沙に就く。

遠鷗水に浮んで靜かに、

輕燕風を受けて斜なり。

此の身醒めてまた醉ふ、

興に乗じて即ち家に歸る。

(春歸)

に至つてはその外見を眞似る者が後を絶たない。

ところで、杜甫には詩と酒とにおいて兄事する一人の先輩があつた。外でもない。十歳ばかり年長の「詩仙」李白その人である。

李白と杜甫は普通に唐代詩壇の双璧と稱されるところであるが、又共に最も酒を愛し、且つ廟堂に入つてはうだつの上らぬ小役人を出でず、安史の亂以降は各地に流寓し、ついに蕭條たる

最後を異郷に遂げたこと迄軌を一にして居る、李白に關する杜甫の詩は十餘篇を數へるといふが、特に人口に膾炙しているのは、例の「飲中八仙之歌」における

李白、一斗詩百篇、

長安市上、酒家に眠る。

天子呼び來れども船に上らず、

自ら稱す、臣は是れ酒中の仙と。

だと思ふが、これは李白の詩票に敬意を表すると共にその豪酒、痛飲ぶりに快哉を叫んだものであらう。

ことわつて置きたいが、私は格別飲酒を推奨して居るわけではない。元來酒飲みが酒を飲むのは彼自らの止むに止まれぬ、内的要求によるものなのだ。

又、古の天才詩人達の天馬空を征くが如き生活ぶりに對しておこがましい批判を試みようなどといふのでもなければ、反對に當代の人々がいかに醜飲亂醉の限りを盡すことがあるからといつても、それを以て直ちに李、杜兩詩

炭 層 (抄)

白 木 英 尾

目のあたり黒き層なす地ふかくうつし身ひとつ下りてゆけり

「労働」を型ごりて立つ等身の像の腕につるはしを抱く

鋼索のうごきゆく下四五尺をまれまれおつる黃の油あり

帽たかくともすあかりは岩壁に黒びかりする水をてらしぬ

暗き奥よりこそりと人の乗りて來る炭車は熱き風をともし

水赤きながれのおもて霧わきをり日すがら寂しわれの忿りも

(短歌研究十二月號より轉載)



抑留記 (参)

知 巨

一面波で略奪を受けてから、食糧のない行軍が一週間も続いた、生カボチャや、水をのんで海林についた。

海林につくとすぐ「日本歸還」が出来るのかと思つていたら、ソ連兵に導びかれて、以前彈藥倉庫だつたらしいあばらやにほおり込まれてしまつた。外の部隊も先客として一万余も收容されていたらしい、この海林收容所に入れられたのが私の抑留の第一歩であり、豫想もしなかつた、四年間の抑留もここから始まつた。この收容所に入つて以來私達の仕事は、彈藥庫の彈藥運搬とその日その日の、食糧受領が最大の日課だつた。これらの作業もごく少數の兵隊が動員されるのみで、外の兵隊達は彈藥倉庫でごろ／＼寝ころんでいるのが常だつた。

人間が空閒な時間が出ると、自然喋べつたり食つたり

する事が旺盛となるものだ、然し食うことは制限を受けてそれ以上はどうにもならないので、喋べる事のみが許された最大のはけ口となつて来る、今日も大山の戀物語から始まつて、お國自慢や、菓子の料理まで話がはずんでいる時だつた。糧秣受領から歸つた、小笠原が「おい、大變なニュースを聞いて來た」と云つて皆を見まはした。

ニュースと聞くと、車座になつていた兵隊達は早く聞きたいと云つた顔で、小笠原に視線をそゝいだ、小笠原は得意そうな顔で話し出した。

「糧秣受領に行つたら、女收容所の話を聞いたんだ、なんか驛の向うの方に、娘さんや將校の奥さん連中を收容した收容所があるそうだ」

こゝまで話すと、小笠原が多少顔を赭らめてやつた。

そこで小笠原は今聞えて來たばかりのその女子收容所の話をかいつまんで話した。

「可愛い相な話だ、だが敗れた現在、まして捕虜の身ぢやなんともならん、日本の兵隊だつて支那事變には、色々なことをしたからな、それが今度こちらにお株が廻つて來ただけだよ」

大山が苦笑しながら、當然と云つた顔つきで云つた、みんな急に考へ事でもした様に、だまりこくつた。

私も大山の意見が當り前だと思つた、戦争ですさんだ人間の本性が、野獸の本性に早變りした、その刹那の出來事に過ぎないのだ。若し日本人がその立場にあつたら、當然日本兵もそれを行つていたかも知れない。我々が以外に思つたのは、何時も加害者の側にあり、被害者の、否、その様な敗地にたつた例がなかつたせいかも知れない。

浮 沈

九月も過ぎ十月も半ば過ぎんとした時、私達の頭上に「日本歸還」の命令が下つた。

兵隊達はこおどろして喜こんだ。私達は二千名を一ヶ大隊として牡丹江驛より、汽車で雞溝か、ウラジオに運ばれて、そこより歸還出來ると云うのだ。

私達が列車に乗りこんで、否乗ると云うより押こめられたと云つた方が適當かも知れない。それ程、隙間もない程

積みこまれた。——だが、誰一人として不平を言う者がいない。「日本歸還の列車に乗り込んだんだ、一人でも多く、一日でも早く、お互に歸りたい」と、云う願ひが兵隊達の頭を支配していた。

それより、歸國と云ふ言葉そのものが、兵隊達の不平を忘れさせていたのかも知れない。

私達の小隊は、十二車輻目に積み込まれた。

勿論列車と云つても、貨物車で真中を一間位透し、左右を二段に板を張り、その上に寝る様にした極めて不衛生な貨車だつた。

——三時間位して列車は靜かに迂り出した。一時歡喜の聲が高く昂つた。

さあらば牡丹江よ

また來るまでは

しばし別れの涙がにじむ

誰かが小窓から首を出して、ラボール小唄くすしを、どら聲で唄い出した。一人が和し二人、三人と和し、貨車全體の聲となつた。残すべき感傷はもたない、然し幾月か難澁なそして苦しい生活を送つた土地と、今別れようとしているのだ。人間は苦しければ苦しい程、その生活に、その人生に深い愛着を感じる。その心理が今兵隊達の胸底を靜かに流れ去るだろう。唄聲が列車の騒音に消され始めた頃、牡丹江の焼けたゞれた町が、小さく置き去られてい

た。

汽車は真しぐらに北西に進み出した。

十月末の平野の枯草は、凡庸な山なみに對し變化なき水彩畫の如く窓より過ぎる。

何時間か走り續けた時、窓際に落葉した白樺が、白い幹をのぞかせ始めた。手持無沙汰の兵隊達は、急に變化し出した四圍に奇聲をあげ始めた。

「スイフンガは、もう直だ」

「ぢやあ、國境だな」

「そうすると、俺達はやつぱり朝鮮ぢやなく、ウラヂオから船に乗るんだな……」

「うん。一週間位で上陸出来るかな」

下の段の兵隊達が高聲に話しているのが、聞える。私も（何日位したら家につくだろうか？）など、漠然と思ひめぐらすと、何時の間にか、母や妹の顔が大きく頭の中に廣がつて来て、笑いかけてフツと消えた。次に又故郷の道や屋根等が代つて浮かんて来たりした。

やがて、山間を縫つて行く列車の右側に、異郷臭い「スイフンガ」靜かに、沈みかいつていた。

その夜は、國境を越いて余り家もない邊な山國らしい所を、一晩中走り續けた。

冷々とした異國の寒さが、一層身に沁みる様に感じた。兵隊達は、稻策をならべた様に安堵の眠りについていた。

朝、東の空が白みかゝると、鐵のカーテン内を、何者にものぞかせまいとするのか、軍事基地でもあるのか、汽車はもう進まなかつた。異様な驛ともつかない片隅になけ出されていた。そこには、ねむたげな護送兵が、眼をむき出して動哨していた。

夕方になると、再び昨晚と同じ様に列車は走り續けた。三日目か四日目か記憶はないが、兵隊達が不審をもち始めた頃、

「各車輛バンを取りに来い」

傳令が言い去つた。列車は大きな柱時計のある立派な驛に止つていた。そこには、スタリオンと軍人の寫眞が、障子位の大きさにかけられていた。時計は午前二時を指していた。元軍屬の佐藤さんがバンを受領に、降り様として驚聲を上げた。

「おい！此處はハバロスクだよ」

「えい！」

「どうして解るんだ」

「あすこに書いてあるんだ」と、玄關口らしい上の横文字を指さした。

何か大きな期待を裏切られた腹立たしさに、いら／＼して来るのを抑える事が出来なかつた。歸國と云うそのものにも、大きな溝が出来た様に、然し何と云う皮肉な運命だろう。我々の運命なんて浮沈だ、川を流れる一片の木材

に過ぎない。ある時は迂頂點に喜び、ある時は奈落の底に泣濡れ、それなのにその流れには、何一つ反抗出来ぬあわれなそして小さい存在なのだ。

壓 制

一週間して山間の「エスベストコートガヤ」とか云う、町らしい所に降された。まさまじと見る異國の風景に眼をみはつた。

家はほとんど二階建て、屋根は急傾車してとんがり、壁と云うものを持たない。太い丸木を下から順々に積み重ねその上に屋根を置いた様な、積木細工みのものだ。窓は一軒に二つ位で、入口も一ヶ所しかない。

町を通る人々はみんな、六尺豊かな赤顔の大男ばかりだ、女と云つても我々日本人より一般に大きい。

私達はこの町の囚人收容所に收容されて半月位した時、こゝから百五十キロ位離れた、山奥に運ばれた。こゝは以前小つぽけな町だつたらしく、例の積木細工の家が二三十軒小高い山に並び、鐵道の跡が縦に走りその鐵道を川が十字に横切つていた。その鐵道の沿線には囚人が收容されたらしい鐵柵に包まれた家が、牛ば傾いて點々としていた。

私達五ヶ中隊は、川の近くの收容所に詰込まれ、他の二ヶ中隊はなお奥に運び去られた。その夜は飢餓と寒さに、窓ガラスも戸もない破れ家に抱き合つて過ごした。

次の日から補塲としての作業が始まつた。先づ傾きかけた家をなおし、歩哨が見張る望樓を建て、自分自身を拘束する柵を作つた。

然し何分困つたのは食糧だ、朝晩は馬糞の高梁か大豆、キビ等で、晝はパン食で二百七十瓦ある事になつていた。

近頃は小隊長が、自身でパンを切る様になつた。編成替があつてからの事だ。今度の小隊長は福島縣出身の酒井と云う人だつた。私は同郷でもあり家も近いと云う關係から小隊長當番を言渡された。だが私は彼の顔も、性質も好まなかつた。然し舊軍隊の舊幣は捕虜になつた現在まで、以前として維持され個人の主張も立場も、理解してくれなかつた。

今日も小隊長は二階の暖爐の近くに席をとり、兵隊が受領して来た下駄カバン程の、二ヶのパンを受取つた。

小隊長がパンを切る時には、必ず一尺近い臺を自分の前に置き、その上に天幕を廣げ、臺の陰は兵隊の視線をとゝかぬ様にして、切り始めるのが常だつた。私は小隊長の小用事をする關係から、眞向いの階下に席を取つていた。隣の高山が急に私をこづいた。

「小隊長がパンを切り始めたぜ」

「……………」

私は答えないで小隊長の動作を見ていた。
「ちいー随分取りやがつたな」

高山がしきりに腹立たしそうに、氣をもんでいるその時には、もう臺の陰に五百瓦位のバンが、ころけ落ちて見いなかった。

「何で、俺が馬鈴薯を拾つて来て食つたからつて、さんざんやがつて、自分は何をやつてもよいのか」

高山は頬こけた青黒い顔を、歪がませていた。それも道理。途二三日前、高山が炊事場のごみためから凍うつた芋を拾つて来て食つたと云う理由で、小隊長は、

「日本人の名折だ、捕虜とは云い軍人としてのなすべき行為でない」と云つて、顔が黒くぐれする程なぐり、最後に五ヶ條を云わせて、彼の前をしりぞけたのだ。

その日本人の拘持を誇り、軍人精神でこりかたまつてゐる小隊長が、兵隊の肉であり血であり命の綱である、一食分のパンの頭をかすめ食おうと云うのだ。高山でなくとも憤慨するのが當然であらう。

小隊長は、三つの山をつくつて分隊に渡した。分隊にもつて来ると、今度は分隊長と古参兵が、その頭をはねて兵隊に分配されるのだ。私達の手には、一人分として来る時には、二百七十瓦あるべきバンが、すでに二〇〇瓦位になつてしまつてゐた。

然し何一つ反抗出来ぬ様教育された、いや、絶對的服従の下に育つた私達には、不正も侮辱も彼岸の火として沈黙を守るより方法は知らなかつた。

犠 牲 者

「生き抜くんだ!!」

「生き抜いて日本に歸らねばならぬ」

兵隊達は青黒い顔に、ある希望を輝かせながら生き抜くために、全生命を燃焼させて居た。だが、生き抜くための條件は日に／＼悪化するのみだつた。第一にシベリヤの十二月ともなれば、零下五十度近く下る事は普通だつた。それに食糧は朝晩大豆の飯で量は一食百粒内外、その上作業はノルマ(基準量)で強いられ兵隊達は日一日とやせ細つていつた。私達の小隊からも榮養失調と季節變化から肺炎となり、もう五六人病院に運ばれていつた。入院患者はどの様な患者にせよ骨と皮ばかりで、最も肉のあるべき尻等は歳老いた牛が一月も糞を食わなかつた様に、骨が出張り皮がしなびてゐた。

ある朝のことだつた。兵隊達は飯のほいでもう眼をさまし、くぼんだ眼をぎらつかせてゐた、私は狼の様な小隊長の食事を、作るため食器を出しながら、ふといやな豫感がした。それは、私の床から三番目の大木が、何時もなら人一倍早く起き、喉をならして食飯のあがつて来るのを持つてゐるのが、今朝はそれを忘れた様に眠りこけてゐるのだ。私は、隣の高山に

「大木が起きないぜ、どこか具合でも悪いのか」

「知らぬ」

高山も不審そうな顔をしてゐたが、振り向きもしなかつた。その中味噌豆の様に煮た飯が分配された。然し大木は未だ起きようとしなかつた。高山が近くに行つて

「おい、何時まで寝てるんだ、飯だ、起きろよ」

「……………」

「變だな」

高山は大木の額に手をあて

「いや!!死んでる、大木が死んでる」

大きな聲を上げて飛びのいた。

小隊長が一時騒々しくなつた。

小隊長が上段から降りて来て、だみ聲を上げた。

「人間の一人位死んだからつて、さわぐな」

食はんとする食事を中断された腹いせか、兵隊一人を捕虜になつた現在でも、虫けらの様に考へてゐるのか、狼の様な眼で周囲をねめつけて立つてゐた。兵隊達は一時なりを沈めた、だがその眼は侮辱と憎しみとなつて、小隊長の上に集中された。薄暗い部屋に、無氣味な一瞬が流れた。小隊長は、

「植原ランプをもつてこい」

と私に言いつけたので、私はランプを、下段の大木の寢臺に連んだ。燈はほの暗い光りを大木の顔にふりそゝいた。あたかもほりの深い調刻像の様に、ランプの光のせい、

眼は深く落ちこみ、頬骨のみが隆起してゐた。

その反面彼の顔面には、苦痛の跡一つ見られなかつた。魂も肉も心も總て燃焼しきつてゐたのか、それとも苦悶も希望も光明も、超越し切つてゐるのか、靜かに永遠の眠りについていた。

これが、歸國を胸に奥深く秘めて、異境の地に散つた最初の犠牲者であつた。(續く)



診療余話



弘 中 一 雄

小便一町糞八町

目八分と云ふ事がある。大工はあの簡単な曲尺で下から屋根の勾配を測定してゐる。そしてちやんと下で鋸を使つて切つていつた板がびつたりと合ふから熟練も大したものである。またこれ等は少く共曲尺と云ふ道具を使ふのだから物指があると云へばそれ迄。だけれども昔の農林技師等が山に行つて遠くから山の姿を見てあそこには大體何萬石の樹木があると等と見當をつけて大體當つてゐると云ふ事や、軍人の

目測、或は音響による距離測定には正に驚くべき正確さがある事等からしてこの目八分は馬鹿にならぬものである。昔からの諺に「小便一町、糞八丁」と云ふ事がある。数人の者と山に行つた時等痛切に感じる事ではあるが一寸小便すると確かに一丁は遅れてしまふ。事大便に至つては大概の場合こんな時は腹の調子の悪い時で八丁位は遅れるのが當り前である。氣はあせり乍らも、下腹が漲つて痛み乍ら出さうで出ない。やつと用を足してさて又、「野糞は一步またいでから拭け」と言

ふ言葉通りにして同行の者はと見ると最早はるか遠くに行つてしまつてゐる。

由來日本人は何でも目八分でやつて來た國民であり又それが非常に熟練して居るのである。漬物の鹽にせよ、煮物の砂糖にせよ、風呂の湯加減にせよ全部目八分である。これを科學的にと言つても中々そう簡單にはいかないのである。今更寒暖計を入れて、攝氏四十二度にして呉れなんて言つてゐる家庭は無い。酒の罐でも、ビールの冷し加減でも皆いゝかげんなものである。前の漬物の話の如くそれは殊に家庭の主婦に多い事だ。毎日炊く飯や味噌汁こんな事で何分で炊けるか解つてゐる筈なのに時計をたよらずに吹き出す湯氣やあぶく等を目標にしてゐるからこけたりなんかするし、又その間注意がそこにあるから他の仕事も満足には出来ない。風呂もその通りで冬は何分夏は何分で沸くか、風呂の水は蛇口を何分開けて置けば一ぱいになるか一度

測定して置けば水道の節約になるし、又石炭も何の位で済むかも量ればわかる事である。所が残念な事に科學的な訓練の無い日本人は殆ど全部これが駄目である。私は家庭でこの事を實施させようとして分時計を臺所に備へてやつたが、妻と母も舊體制の人間でどうも面倒臭いのか、目八分が良いのか一向に分時計は見向きもしないので今はあきらめてゐる。自分の家でかくの如しだから病院で看護婦に教へる資格は無いけれども、これも同様、數量、時間、等に於てルーズな事大したものである。これはこの病院ばかりでなく大學病院の教授すらこの點だらしが無いのである。例へば手術の時手を洗ふクレンジールの濃度はどの本にも二%と書いてある。所がこんな濃度では手が荒れて一べんで參つてしまふのである。それでは一體どの位の濃さでやつてゐるか云々と、濃くても〇、五%位で普通は〇、二——〇、三%のクレンジール液を使つて居る。さてこの%も正確

なら良いが、大體、看護婦が目八分で洗面器の中へ、たら／＼と垂らしてそれで〇、Kである。煮沸消毒の時間もメスと縫合糸では大いに異つて來るがこれも大體いゝ加減な時間で、少く共時計を見ては居ない方が多い。さて日本の商人は前から良い品物は作らぬと言はれてゐたが、注射器と針の合はないのは實にあきれてしまふ。横須賀病院に居た頃は特別注文で何の注射器の先も皆同じで、例へば五〇瓦の注射器でも三分の一の針がつけられる様にしてあつた。全國的にあゝなれば良いのだが、商人はそうすると商賣にならないのかやろうとしない。最近縫合針や縫合糸の大小が不規則で何號と言つてもその通りのはあまり無いし、私もあまり何號なんて事はあてにしくなつた。結局ルーズな商人の爲に負けてしまつたのである。その爲かこの頃は大部分目八分と言ふ事に馴れて來た様である。目八分と言ふ事は必ずしも悪い事では無いが、これのみを

使用してはいけない。少く共、吾々が目八分に馴れる點は自分で測定して見る必要がある。數回測定してやゝ正しい數字を得てからの目八分は完璧である。やたらにやる目八分は誠にあぶない。

然し分り切つた事は目八分でやれば仕事早いからこれに限る。自分の歩行速度、長さを自分の身體の一部を使つて量る方法、その他時間的な測定法等普段に知つて居たら何の位役に立つか解らない。

科學すると云ふ言葉がある通り今や世を擧げて口だけは科學と言ふ。私は今の様な状態では未だ科學の入口迄來て居ない様に思ふ。これから少年はもつと科學を愛し、しかもその上に樹てられた、所謂身につけた所の目八分を縦横に使つて行つたら良いと思ふのである。

汗

暑い時に汗をかく。これは發汗によ

つて體温を調節する爲である。當り前の事ではあるが次の様に分けて尋ねられると解らなく成つて来る。

汗は、運動性發汗と、精神的發汗とに分けられる。誰でも肉體的勞働をすれば汗をかくと同様、冷汗と云ふか精神的に困つた時にかく汗がある。

こゝに誰でも漠然としか知らない事は、運動する時に出る汗は一般體表面から出るが、精神的な汗は足の裏や掌から出るのである。俗に手に汗を握ると云ふ事を云ふ。勞働して居る時の汗が掌や足裏から出ないと云ふ事は誠に都合の良い事で、是がどんなに知られたら汗で器具が滑つて仕事にはなるまい。

實に天の爲す業は不思議と生活と云ふか、生命と云ふかにとつて有難く出来て居るものである。夏に晝寝をして見給へ、横に寝てゐると、上に成つた側だけは汗をかくけれども、下の方の側には汗をかくないのである。こゝは如何なる理由によるものであらうか。

この問題を研究した人の説によると、下にした方の植物性神經の壓迫によつて汗腺の分泌機能が低下するだらうと云う事である。

人間は汗腺が發達して居るが、犬や猫はあまり發達して居ない。犬は汗をかくないからそのかわり涎を出す。夏なんか犬が長い舌を出してハッハッとせはしく呼吸して居るのは良く見られる事である。

猫は脚の裏に汗をかくのである。

さて精神的發汗は、何の程度に出るかと言ふと、例へば簡單な算術の暗算で「6×7」位の問題でも汗が出て居るのである。これは何うして測定するかと言ふと、精神電流現象と言ふものを應用する。この裝置は精神性發汗の起る手掌の前時に電柱を置いてこの間に電流を流してやると發汗の如何によつて皮膚の電気抵抗が變動するので、電氣の流れ方に變化が起ると云ふ原理を利用したものである。この電流はマイクロのオーダーであるから、これを強

電流計によつて鋭く光を反射させてスケールの上で動きを詰むのである。これで検査すると、被検査者の頭をこつんと叩いても「今の厚生大臣は誰ですか？」と尋ねても發汗現象が起つてスボットライイトが大きくスケールの上を揺れるのである。

この様に人間は疼痛とか、又は六ヶしい問題を考へるとか、嘘をつくとかすると發汗を起すのである。これを利用して實際に使つて居るのが嘘發見器である。これには電流を増幅して音に變へたものもある。然し嘘のうまい人とか帝銀事件の様なコルサコフ氏病の様なものとか、思考力の低い子供にはあまりあてになる方法では無さそうである。

汗は汗腺から出る。そして前に言つた様に體温を外界に出す。故に熱のある患者は身體をより熱くして、アスピリンでも飲んで寝ると汗を澤山かいて熱が下つて来る。反對に寒い中は汗を出さぬ様に、一つは身體の表面積を

少なくする爲に立毛筋と云ふものが收縮して、汗の出るのを防げるのである。

子供が疫病なんかで重態になると皮膚が乾いて弾力が無くなつて来る。この時、昔の醫者はよく足の裏なんかにかかしをはつてやる。すると汗をかく、ともかくも汗をかく様ならリンゲルや輸血をやつて救ふ事が出来るが汗もかなくなつた者は殆んど絶望である。

普通吾々の體内の毒素は肝臓で解毒されて尿となつて體外に出されるのであるが、それが大量である時、血液の循環の良くない中ではうまく排泄されない。よく宿醉の中に皮膚がから／＼に成り、口がかはきたまらない時がある。この時迎へ酒をやるとか、熱い所に行くとか、運動をすると汗が盛々出る、するとアルコールの毒素が汗となつて體外に出ると宿醉が回復する。炭酸等でよく宿醉のとき坑内の熱い所へ行つて汗を出して氣分を回復して来る人があつた。實にうまい治療法である。

兎も角も汗をかくと云ふ事は人間が活動して居るときの方が高い。幼年期から壯年期迄は最も活動する時期で一番汗も出る。老人ともなれば、仕事を

するのにも手や足がかさ／＼で手につばをつけなければならぬ。

汗に限らず、身體の分泌物はその生活力のバロメータになる。子供がよだれを流す、これは消化管の健康な證據である。美味いものを見ても唾液も出なくなつたらおしまひだ。歌舞伎等に於ける濡れ場と言ふ事は、矢張り體液の分泌を表現して居る。老ひらくの戀も有らうが概して子孫存流本能の活発な二十歳代から四十歳迄が體液の最も多いときであり、その爲に多く汗もかくわけである。水分の多い時代の子供乙女、青年の皮膚のびち／＼とした弾力こそは、天から與へられた人生至上の喜びの源泉ではないか。

汗!! 汗!!
汗を出して 働け
汗を出して 樂しめ

汗が無くなつたら人生に用はないです。

ねがいいます

「ねがいいます、ねがいいます」

バスガールは停留所が近づくると繰返して言ふのである。明らかにストツプねがいいますと、言ふ中のストツプを省略したものである。

「先生、アッペらしいのが内科から参りました」虫垂炎の事をアッペと略して言ふのである。勿論、略語は米國の兵隊の間では當り前でむしろ略語が普通の言葉と思つて居る位である。例へばG・H・Qにしろ、R・T・Oにしろこれを本當に讀んで居たら長たらしくて急ぎの時は間に合はない。丁度日本で言ふ安本とか、炭旁とか言つたたぐひである。

元來、文化を外國から吸收し乍ら成長して來た日本に於ては、外國語をそのまゝ、日本語として使つて居るものが甚だ多い。特に醫師看護婦等は現在迄

獨乙語を多分に使つて居る。てにをば獨乙語を言はれるものであるが甚しくなると全然獨乙語で無い様なものになつて居る。

「あのクランクはステツたか？」即ち「あの患者は死んだか？」と言ふ言葉の中にクランクが患者と言ふのは正しい獨乙語だがステツたと言ふ言葉は獨乙語のステルベンと言ふ言葉の上のステの部分だけとつて略して、その下に……したと言ふ過去の動詞をくつつけたものである。これは病院の關係者だけ解る言葉である。

その職場だけの者が解る言葉、これは病院に限つた事で無く何處にでもあるものだ。

特に隠語と言ふものがある。それは女性に多い。生理日の隠語は言はずもがな、實に多種多様である。これは多數の間に働く者にとつて人に聞かれると體裁の悪い事から自然とそうした隠語が生ずるのであらう。小便なんか最も隠語の多いものである。單的に言ふ

と獨乙語のハルンと言ふのを使用する。關西方面ではむしろラテン語のウーリンを使用するが、これも男性の醫師に多い。女醫さんは大體、タテンと言ふ。これは本來叔母さんと言ふ言葉だが何故これがハルンと關係あるのか解らない。有名なデパートでは、例へば「一寸遠方、お願ひ」或は「しんかく、頼むわよ」と言ふと、この遠方又はしんかくなるものが、ハルンの隠語なので、お客がいくら居ても平氣で言へるわけである。そしておくゆかしい事でもある。大勢居る中で、平氣で、「おら一寸、小便たれて来るからね」なんぞと言つたらいくらかお化粧がうまくても全く艶消しである。隠語が職場に於て使用される場合はこの他に最も多いのは値段の符牒である。

「お神さん、この下駄いくらでしたつけ」「むのさ」

この店では、むすめふさほせかるたで、一から十迄を現して、のは圓を意味するから一圓五十錢と云ふ事にな

る。

かゝる例は一商店等に限られて居るけれども、大道商人等になると全國的に通用する隠語を持つてゐる。やりかん、しやり、のたぐひである。

さて誰もある事だからけれど、自分の家庭に於ては何うであらうか。あるフランス人の家庭ではその夫婦が結婚した當時より楽しい人生を送らうと相談して數十の、夫婦相互にしか解らぬ隠語を作つて地上の天國を共に楽しんだそうである。元來夫婦ともなれば言語をこれ程省略してわかる者はない位に調子がうまく行かねばならない。

「あれはどうした？」
「やつとききました」
「でなには？」「O.K.よ」

他人が聞いても解らないけど「事解るのである。だからこれに隠語が二つ三つ入つたら全く他人は馬耳、本人等は東風のそれの如く朗らかなのである。さて吾が家にも「ねがひます」と云ふ隠語は無かつたかな。



秋季短歌大會記

皆

水

十月十五日、庭にコスモスの花が揺れてゐるものしづかな日、朝九時より萬葉に於石城郡歌人をもつた大歌會が開かれた。集るもの四十人近詠一首。司會は熊谷君各社有力同人多數參會にて汗だくの態。選歌晝食ついで歌評にうつる。活潑な意見の交換後一首一首の決定的批評を「あさひこ」主宰大坪草二郎先生に仰ぐ。最後に高點歌順に朗詠をなす。まるで競演會の如く各人が懸命になつて美しい聲を出す。本日は特に翠琵琶宗家竹下夫人や國鐵總裁秘書の筑間氏がわれ名調子を聞かされて、なる程朗詠すれば歌はいいなあと連發して午後四時名殘惜しくも散會した。

當日の詠草五十三首うち五首選、高點歌及大坪先生選は左記の通り。

十點	青い灯の下に頬やせて眠る妻幸福などと言はれない	矢内 志良
八點	此頃	佐々木 淳
七點	ときとして平凡に思ふ吾かなしすでに失ひし片足を	泉 吉之
七點	欲す	橋 本 清
七點	落ちかかる夕陽に鉄のきらめきて母は晶より上り	松田 正二
七點	ついにして淋しき停年の父ならむ顔こはばらせ強がり	石 卷 草文
七點	地下足袋のまま腰かけて水を飲む厨に遠くひぐらし	白 旗 道子
六點	の聲	
六點	傘ぬちにいたはる母の肩細し醫師に通ふ秋雨の路	

- 六點 亡き夫の常着でありし軍服のかくしよりいでしマー
ジャンのバイ 峰岸うめ子
- 五點 お願ひしますと言ふ事も初めてなれば質屋の隅にお
づおづとある 星正吾
- 五點 まむし酒舌にふるれば血に通ひほのぼのとして磨あ
たたまる 藤橋清一
- 五點 姉孫はうしろ手に蟬をなかせつ二人の弟孫に取巻
かれをり 高萩尊風
- 五點 静し心を悔ゆる如くにてすみし夕べの月が眠にし
む
- 四點 よちよちと歩む幼子につきてゆく若き母親の毛糸編
みながら 大村亀吉
- 四點 生み月を数えて笑まふこの秋は妻と交する話の一つ
猪俣哲信
- 四點 坑口に書替らるる保安事項日課のごとく今朝も讀み
返す 渡邊力
- 四點 銀とりてこの庭畑に播きし故園引するさへ惜しき大
根 (以下略)
- 大坪草二郎先生選
- 〇 ついに淋しき停年の父ならむ頼こはばらせ強が
りを言ふ 松田正二
- 〇 まむし酒舌にふるれば血に通ひほのぼのとして磨あ
たたまる 藤橋清一



句會記

秋 岳

〇 一匹の病み蠶とりあげ撫でておる老ひたる母の臘は
かなし 中村鐵太郎

〇 白萩に露おく今朝を産み月の眞近き妻にかわり飯炊
く 山田留臣

〇 坑口に書替らるる保安事項日課のごとく今朝も讀み
返す 渡邊力

十一月十五日、萬葉廣間を會場として、久方ぶりに句會
を催す、俄かに襲つた寒さのせい、か、渡邊何鳴先生を始め
參回を豫定された方々が不參のため、出席者僅かに十名、
誠に寒々とした集りであつた、然し集られた人々の熱心な
る作句態度、その作品に接し、小生なぞ遠く及ぶところに
あらすとの感を深くした。

一〇點銀龍、八點秀坊、六點銀狼、知巨五點、雄天、後
藤忠一四點、九牛、東子(以下略)

三點 木の實落ちて静寂もとに戻りくる 秀坊

- 三點 秋の蟬貝より白き影を布く(望洋莊にて)
骨缺きし胸は西日にあはれ透く 銀狼
- 〃 峽紅葉中天に葉を返し散り 知巨
- 〃 熟し柿落ちたる音を大地吸ふ 東子
- 二點 簗をそびらに柿の熟れ残る 雄天
- 〃 父葬る地の闇燈明りする 後藤
- 〃 鶴嘴に蟬鳴すがりふりがたし 秀坊
- 〃 視覺未だ紅葉の朱を抜けきらず 九牛
- 〃 柿食めば故郷遠き身なりけり 銀狼
- 〃 香をぬすみし如く娼婦が菊離る 銀龍
- 〃 眞砂掘る深さに秋の陽がたまる 知巨
- 〃 蓮根掘る底より汽車の響き来る 銀龍
- 〃 他色なく白菊にして暮れ残り 知巨
- 其の他
- 〇 鵜の骸に今日一日の波とゞく 銀龍
- 〇 空蟬が落ち樹の精をたしかめり 銀狼
- 〇 鳥屋の夜は櫓さしくべて鶴焼く 九牛
- 〇 書に倦めば菊の香りを深く吸ふ 雄天
- 〇 さゝにこりせる池尻や蓮根掘る 秋岳
- 〇 月影になを殘菊の路白し 紅柿
- 〇 以上



短歌

白木英尾先生選

新春雜詠

〇 定まれる勤めを持てばこの春を 鯨岡豊

〇 こよなき年と祝ふうれしさ 新らしき年を祝ふて門口に 飾りし青き松のすがしき 坑口に吾を待ちし子の手とり 連れ立ち歸る保安終りて

ほとほとにストーブの火をかき立てて

うからつどへば鳴る除夜の鐘

ま白なる紙をひろげぬ書初に

親しむ吾子の臘は澄みて

大村 亀吉

炭礦の長屋を巡り正月の

鼓鳴らして萬才が来る

新らしき地下足袋はきて正月の

初入口に家を出でけり

明智 枯舟

元旦の山桑畑に日さしそめ

われはおろがむ遠き山嶺

レットバーチ終へて炭礦にあらたまの

年の始めを心澄みたり

猪俣 哲信

坑夫わがうから揃へて無事なるを

山神様へ詣で祈りぬ

悲なく今日の日の出を迎へたり

炭塵に汚れ坑内出でて

大原 重雄

耳遠き故に人目をばかりて

吾を待ちをり哀しき父は

いろいろに金がかゝれば父親の

額に深き皺あらわれる

新年雑詠



渡邊 何鳴 先生 選

金子 鈴子

元朝の庭を淨めて鶏を呼ぶ

炭礦言葉荒く初湯に交しをり

初髪に貧苦をかくし妻粧ふ

銀 龍

初日影鑛槽刻々身を起す

初夢やかきそめの戀美くしく

鶴嘴をとる掌響かし初詣

秀 坊

初日影白妙の襟正しうす

いたつきの身なれど賀狀投函す

初日かけ石炭あれの掌に揃はるる

知 巨

元旦や去年傷つきしままの身に

初鶏を麻雀のパイ手にし聞く

炭礦人の列つくりをり初映畫

東 子

元日や靜かに憩ふ選炭機

にこやかな子に育ちけり初衣裳

粧ひのめぐしき妻と屠蘇を酌む

編集後記

賀正

昭和二十六年元旦

編集部

◎終戦後、足かけ六年に亘り、我々の經て來た道程は、今更、特に申すまでもなく、何と苦難に満ちたものであつたが、混沌たる政界、財界、思想界が、ようやく落ちつきかけたと思つたのも束の間、朝鮮の三八度線に突如として卷上つた戦塵は、またまた我國内のあらゆる方面に重大なる影響を與いつつ、いつ終熄するか計り知れない。

我々は、身を以つて戦争の惨酷なる悲劇を體驗している。再びこの愚は繰り返したくない。一九五一年の新年を迎ふるにあつても、決して、安意な氣持はゆるされなない。全面的か、または單獨か、どちらかの形で講和問題も取り上げられるだろう。然し、我々の前途には、また、英の道がつくだろう。世界永遠の平和が、一日も早く來らんことを希むこと切なるものがあ

る。

◎本誌も當年とつて六歳の春を迎えることが出來た。すこぶる健在である。如何に健在であるかは今月號の内容の充實さが充分證明してくれるだろう。

先ず巻頭言についで所長、労働組合長、社員組合長の年頭の挨拶は、それらの立場から意見を吐かれて居る、いずれも含蓄深いものがある。

次に創作欄であるが、車田氏の「やまの誓い」と知巨氏の「抑留記」は昨年度より引續いての健筆である。回を重ねるに従つて益々興を増してくることを受合ふ、次號に期待を寄せられたい。

名隨筆、弘中氏の「診療余話」は今年もまた筆硯を新にして、その健在振りを發揮される豫定、これまた期待に反かないものであることを大鼓判をおして保證する。

「春樹暮雲」を書かれた、テネシヤウス氏は、数々の名隨筆を残して、舊臘本店に榮轉せられた。本誌にとつて誠に惜しい人を失つたものである。

◎昨年度の體育會の活躍は實に目覺しかった。平石炭事務所主催の野球、庭球、弓道相模の四種に優勝したほか各種目に好成績を示してゐる。今年もまたがんばつていただきたい。

◎末筆ながら諸氏の御健康を祈ると共に益々増産にはげまるよう望む。(秋)

昭和廿五年十二月十五日印刷
昭和廿六年一月一日發行

（非賣品）

編集人 前 佛 清
宇都宮市住吉町三丁目二〇

印刷所 下野尚徳會印刷部
電話二、三〇〇番

印刷人 岩 松 恒 雄
電話二、三〇〇番

福島縣石城郡好間村

發行所 好間思藻編集部
電話 平 八三〇番
八三一番

日本出版協會
會員番號B二二五〇〇五

昭和三十一年七月
岩田書店 猿文庫
7969